

---

**チートが（ばれたら自分の身が）危なすぎて介入できるか！！**

Acta est Fabula

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チートが（ばれたら自分の身が）危なすぎて介入できるか！！

### 【Nコード】

N5120Z

### 【作者名】

Acta est Fabula

### 【あらすじ】

神様に殺されました、けど美人だったので許します。え、チート？  
？いらぬから普通に人生を謳歌させて下さい。

ブログ・・・だけど死にかけます(前書き)

息抜きです。更新遅いです。

## プロローグ・・・だけど死にかけます

はい、どうもみなさんこんにちは、こんばんわ、おはようございます。

この物語の主人公で旧姓「高宮 京」です。

性別は「男」、MAN、　、けして女じゃないっすから名前で勘違いしないように!!

まあ、今ので分かったかもしれないっすけど俺は転生者で神様に殺されてこの世界に転生させられたみたいなんですよ。  
そのときの会話をどうぞ。

「申し訳ありませんでした。」

「いや、もういいっすから。顔を上げてくださいよ、きれいな女性に頭下げられるとこっちが恐縮しちまうっす。」

この目の前で頭を下げる女性（巨乳）俺を殺した張本人で神様らしい。どうやら人間の寿命が乗ってある帳簿にコーヒーをこぼしてしまっただけでそれを拭く時に力を入れすぎたせいか俺の名前が書いたペー지를破ってしまったらしい。それが原因で俺は心臓発作で死んでしまったわけだが・・・何、神様の女性はみんなこんな美人で巨乳なんですか？目線が神様（巨乳）の胸元に集中するんですけど、頭を下げるにより胸がぶるんぶるん重力に引かれて動く。目線を逸らせない!!しょうがないよね!!だって男の子だもん!!

「あの〜」

「あっ！すみません、どうぞどうぞ話の続きをお願いします」

「は、はい。えっと、こちらの不備で貴方を殺してしまったのであなたには違う世界に転生してもらおうと思っっているのですが・・・」

「はあ〜、転生ですか？違う世界って言うのはどんな所なんですか？」

「はい、貴方達が言う二次元の世界、アニメ、マンガの世界ですね。」

「アニメとマンガの世界ね〜。正直な話あんまりそういうのは見ないんですよ〜自分は。友人から何冊かマンガを借りたことがありますでしたがそれっきりなんですよ。いつもバイトばかりしてましたから。」

「それでなんていう世界なんですか？」

「リリカルなのはの世界ですね。」

「リリカルなのは？・・・あ〜FORCEですか？それなら友人からマンガを借りて呼んだことがあります。」

「い、いえ、FORCEではなくSTRIKERSの世界の始まる前に転生してもらおうかと。」

「FORCEじゃなくてSTRIKERS？。たしかSTRIKERSは友人から聞いただけで全部の内容は知らないんですよ。オッドアイの女の子が戦艦に乗って「焼き払え！！」ってする話でしたっ」

け？

「それで転生するに当たって貴方に特典を三つつけようと思ってるのですが？」

「特典？それって何ですか？」

「能力や容姿何でも良いので今言った数だけ私が付属させる、言っ  
てしまえば神のご加護みたいなものですね」

ん〜正直普通に暮らせたならそう言う特典とかいららないですよね自  
分。あ、けど一つだけ使いたい能力ならあつた気がする。

「重力制御がいいです」

「重力制御ですか・・・？そんなマイナー能力で良いんですか？」

「はい。他の二つは神様が決めてください。」

「えっ！！わ、私ですか？」

「正直な話、今の一つしか考えられなくて。あ、ですけどその二つ  
の特典はその世界に合ったものにしてください。」

神様にそう言うとなんだか一瞬考えるそぶりを見せて何かを考え始  
めた。けどすぐに頭を上げ少し張り切ってるような顔で俺に言っ  
てきた。

「わかりました！！他の特典は私が考えます！！貴方は後ろにある  
白い扉の中に入って今から転移する世界に行ってください！！」

「は、はい、わかりました。」

そういうと俺は後ろを向き白い扉がある方向に歩いて行った。何であの神様あんなに張り切ってるんですかね。俺は白い扉の前に立つとドアを開けその扉の中に入った。いった。

side 神様（巨乳）

「行ってしまいましたか・・・」

青年の後姿が見えなくなるどうやら扉の中に入っていったようだ。

あの青年は私の失敗で殺してしまったのに何も言わずに私を許してくれました。今の人間であんな優しい人はいたいだれだけしかないんでしょう？しかも、あの欲望の無さ！！特典は一個だけ決めて他の二つを私に委ねるなんて、彼は思いつかないといつてました。がきつと遠慮してたんでしょう！！（本当に何も無かっただけです）よし！！決めましたあの人には転生した世界で無事に過ごせるように特典を考えましょう！！えくとたしかFORCEのことは知ってましたよね？なら能力のほうはFORCEからとって、そして魔改造してつと・・・完成！！これであの人転生した世界で手元に行くように設定してつと！！あ、容姿も変えておきましょう！！容姿はSTRICKERSからえくと・・・この少年！！この少年の双子の兄にしたら顔立ちも一緒ですしかなりかつこよく成長するはずです！！そして最後にこの遺伝子を入れて・・・完成！！

よし、これで準備OK！！私は転生させた人の様子を見ることで

きないんで助けてあげることが出来ませんが無事に第二の人生を謳歌できるように祈っています！！頑張ってください！！

side out

つと言っ感じでこの世界に転生させられました私なのですが・・・なんか分からないっすけど神様がすごい余計なことをしてくれたいで危険な目に合いそうな気がするんすよね。まあ、神様に決めてくれって行った自分が悪いので文句はいわないっすけど。

で、いまの自分の状況なんですが。

なんか密閉された子供位の大きさのカプセルの中で溺れかかってます・・・

• 第二の人生早くも終了っすか！！ちょ、たすけ、ごぼごぼpp・・・

プロローグ・・・だけど死にかけます(後書き)

主人公の性格は俺翼の千歳鷺介の性格を少し優しくした感じですよ。

更新は不定期です

気づいたら双子でした！！いや、本当は違うんですけどね。(前書き)

初更新！！

あけましておめでとつございます。

皆さん感想ありがとうございます！！

こんな低レベルな小説を見てくださってありがとうございます。

しかもグダグダ！！主人公の口調がばらばらなのは主人公クオリティー！！！！

気づいたら双子でした！！いや、本当は違うんですけどね。

どうも～皆さんお久しぶり！！プロローグで死に掛けてました高宮京です！！

いや～、本当に危なかったっすよ。気がついたらなんか某野菜人がはいる回復装置の中に居て溺れかかっていたんですから。普通ああ言うのは酸素マスクぐらいつけますよね？

あのあとすぐ白衣着たおっさんが来たんですけど「実験は成功だ！これで聖王が」とかなんとか言っつて、溺れ掛けてた自分はそのままブラックアウトその後の会話何か聞こえるわけがないんですよ。

んで気がついたらどっか違う部屋に連れ込まれていたらしく病院服着せられてました。

しかも股がスースーするなと思ってすそを上げれば：パンツ履いてないんすよ！！いくら今は子供の姿だからってノーパン健康法をまさかこの年ですとは思わなかったす。

そのあとまた白衣着たおっさんがきて会話したんですけど。

どうやら自分はクローンとしてこの世界に生まれたいらしいんですよ。なんでもある家族が息子さんを早くになくしてその悲しみに耐えられず自分を造ったみたいなんですけど、なんか管理局にばれそうになつてこの研究所にすてみたいなんですよね～。それで俺を貰ったこのおっさんは今自分が研究している実験を俺で実証しようとしたみたいなんですよ。

で、その実験は成功。俺の中に聖王？の遺伝子が刻まれたらしいで

す、はい。

……うん、生まれてすぐこんなへビーな話を聞くとは思わなかった。  
で、あつという間に俺が生まれて二ヶ月が過ぎた。…なに早すぎる  
って？だってそんな書くことなんてないんすよ二ヶ月の間なんて全  
部が実験でしたから。

「兄さん何さつきから眩してるの？」

「ん、ああきにすんな独り言だから」

「わかったよ、兄さん」

「そんなことはいいからお前はさっさと寝たほうがいいぞ明日も実  
験があるみたいだから」

「…うんそうだね、おやすみ兄さん」

「ああ、おやすみエリオ《…》」

ふう〜。やつと寝たか。…何すか皆さん？え、お前一人じゃな  
かったのかって？いや〜どうやらその家族が作らせていたクローン  
がなぜか二組作られていたみたいなんすよ。それで自分のほうが大  
人っぽいから兄と呼ばれるようになったんすけど…エリオって  
どっかで聞いたことがあるような、ないような？  
まあいいか。

ああそうそう、自分の容姿なんですけどやっぱ双子だからか瓜二つ

でした。でもエリオが目の色が違っつて言っただんすけど、なんか赤と緑と左右が違っみたいなんですよ。…どこの厨二病患者ですか？まあそれもいいか。

明日も実験があるから俺も寝るか。じゃあみなさんさいなら〜…  
つて

「エリオ！…そこ俺のベッド！…うわ！…よだれたらしながら寝るんじゃねー！」

気づいたら双子でした！！いや、本当は違うんですけどね。(後書き)

少ない・・・

字数少ない・・・

エリオの兄に転生。

トーマつてstsのとき居ましたっけ？

主人公が実験を嫌がっていない理由。

聖王の遺伝子が入ったことによりおっさんが

「これあんまひどい実験したら壊れるんじゃないかね？」

たった一つの成功例を壊すかもと言う自信のなさから  
実験がすつごく楽になった。

エリオも主人公とおんなじ実験を受けているがやっぱり嫌悪感があるらしい。

**急展開！！そして新たな出会い！！**

皆様方にお知らせです。

今日未明、違法研究所に勤務している白衣着たおっさん事「ブライ・クロス（49）」が何者かに殺害されました。管理局はまだ犯人の手がかりをつかんでおらず捜査はぜんぜん進んではないいそうです。

・・・いや、管理局の連中が殺したんですからそりゃー手がかりなんか出ませんよね。

どうも、高宮京です。急展開も大概にしろって感じなんです。まあ、最初におっさんが殺されたことについての説明ですかね。

何でもこの違法研究所は管理局が管理していたみたいなんです。で、おっさんは管理局に雇われた違法研究者でどうやらクローンについての研究をしていたみたいなんです。でも、研究成果がぜんぜんでないから管理局の奴らがおっさんを殺すことを計画していたんです。成果が出ないものはいらないみたいないな感じで。

で、そんなある日おっさんがクローンを二体作った、しかも一体は聖王の遺伝子が入ってるなんて聞かされたら殺す計画は打ち切り、研究成果を待つのがいいんじゃないかと言う風になったんです。でも、一ヶ月、二ヶ月と過ぎていっても研究成果は少しづつしか集

まらない。業を煮やした管理局はおっさんを殺してあたらしい研究者に任せようってことになったみたいなんです。

うん、これはおっさんの自業自得のような気もするんだけど。まあ、そのおかげで俺達はそんなにひどい研究を受けなかったんですけどね。

で、新しい研究者が来てまず実験が変わりました。俺とエリオは別々の研究所に移されて違う実験を受けることになりました、あのとこの分かれるときに見せたエリオの顔がすっごい泣いてたのが印象的だった。

「兄さん!!」

「エリオ!!」

「兄さあああん!!」

「エリオオオオ!!」

「僕のベッドで涎垂らしながら寝るのやめてえええ!!」

「それはおまえだあああ!!」

そのときのエリオを連れて行こうとした管理局員がすっごく嫌そうな顔をしていたのが印象的だった。

新しい研究所について最初にやった実験はなんかの薬を投与されることでした。その薬が何なのか分かったのは二週間過ぎてからだ。

え、なんでわかつたんだって？いや、なんか、少しづつなんです体が成長してるんですよ。八歳くらいだったのが十五歳くらいに。ええ、びっくりしましたよ。鏡見たら伸張高くなってイケメンフェイスがあつたんですから。ついでにマイサンも確認。すっごく大きかったです……。

で、現在に至るつと。

「NO・01」

「はい」

ああ、NO・01って言うのはこの研究所での名前です。

「いまからお前にこの部屋に入ってもらおう。そしておいてあるデバイスに触れてもらう」

「わかりました」

え、喋り方がなんか違う？いつもみたいにつるさくないって？いやいや皆さん、いくら私でも空気読みますよこの状況でアンナ喋り方したら一気に精神崩壊ルートに直行ですよ。

俺は言われた部屋に入ると中を確認……できねーよ。部屋んなか真っ暗じゃねーか！！これでデバイスのところまで行けって無理だろ！！そんなことをぶつくさ言ってるると急に電気がついた。辺りを見回し前を見ると……

長髪で黒髪のきれいな女性が壁に十字架のように張り付いていた……全裸で……

「ふっ……我が生涯に一遍のくいん……ぶっはあ!!」

「は、博士NO・01がいきなり鼻血と吐血してぶっ倒れましたあ  
ああ!!」

「な、なんだとおお!!」

いや、いくら精神年齢が二十八歳でも経験がなかったすから。女性の全裸に耐性がないんですよ。

あーあ。鼻血が逆流して口からも血が出てるし。って言うかこの女性がデバイスなんですか？え、デバイスが人間で誰得だよ。しかも全裸って服ぐらい着させるよあのおっさんたち!!

「NO・01」

「はい」

おれは立ち上がると服のすそで血を拭いた。

「問題ないか？」

「ありません」

「……血を吐いたのにか？」

「…大丈夫です」

「……そうか。ならその壁に張り付いているデバイスに触れるのだ」

部屋の中のスピーカーから聞こえてくる声に答えるとおれは女性に近づいていった。ええ、あまり女性の体を見ないように近づいています。またさつきみたいになったら溜まったものじゃありませんから。

俺は女性のそばにつくと体を見ないように顔を眺めた。うん、すげー美人。やばい顔が暑くなる。ってまて!!

「触れるってどこに触れればいいんですかね？」

体、それとも顔、それとも足、え、こんなでるところ出て引っ込んでは引っ込んでるナイスプロポーションのどこに触れればいいんだよ!!

「なにをしている!!早く触れ!!」

あのかそじじい!!こっちが青少年の悩みをどうにか抑えようとしてんのにぎゃあぎゃあわめいてんじゃね!!ああもうやけだ!!目をつぶってやってやる!!

ふにゅ。

あたりは白く染まり研究所は爆発した。

その時の事を高宮京はこう語る。

ええ、突然だったんです。何があったのか自分でも分かりません。覚えてるのはマシユマロみたいな感覚だけでした。

急展開！！そして新たな出会い！！（後書き）

感想待ってます。

エリオを探して三千里。いや、本当はそれ以上探してるんですけど

たった今速報が入りました。

今日未明管理局の管理していた第28世界の違法研究所が何者かにより爆破されました。死者は研究所の研究員三十八名、生存者は居ないとの事です。管理局ははまだ犯人を特定できず捜査は難航とのことです。そして、その研究所で研究されていたNO・01もその爆破と共に行方不明となりました。管理局はその研究所を破棄、研究所での違法研究の証拠を隠蔽したそうです。

ハローハロー。研究所を知らないうちに爆破させてしまった男こと高宮京です。

いや〜びっくりしましたよ、気がついたら研究所はなくなってあたりは焼け野原になってたんですから。あの時ほど顔が引きつった事はないですよ。で、今の状況なんですけど今自分はお供と共に管理世界を旅しています。

「マスター。そろそろ次の世界へ。」

「ああ、そうだね、アルマ」

俺の前にいる黒髪の長髪で目が紅い美女名前は自分が付けたんですがアルマっていいいます。まあ、今の説明で気づいたかもしれませんが前話で壁に十字架のように張り付けにされていた女性です。あの後のことについて話しますか。

俺が目を覚まして最初に見たのは二つの巨大な山だった。いや、まあ比喩表現なんですけどね。俺はわけも分からずその巨大な山の一つに手を伸ばした。

ふにゆ

「あ……」

へえ〜最近の山は手にフィットするくらいの大きさに変わるのか。しかも、なんかマシユマロを触っているみたいな感覚。ん〜、前にもこの感覚を味わったような？

ふにゆふにゆ

「あ、あ……」

なんか指を動かすたびに聞こえるあえぎ声みたいなのはなんですかね？っていつか後頭部が枕のようにやわらかい何かの上におかれてるような？

「マ……スター……」

？マスター？誰のことなんすかね。っていつか上から聞こえるんですが。ん？よく見たら顔が……

「ぬっあああー!!」

「あ……」

俺はそれに気がつくとも勢いそのまま体を起こし数歩後ろに下がってそれと相対した。

「ど、どちらさまでしょうか?」

「リアクター・プロト00と言います。マスター」

誰だよ?

マジですか、嘘ですよ、勘弁してください。この前に居る彼女の話聞いてわかったんですが、どうやらあの研究所エクリプスウィルスについて研究していたようです。友人からFORCEを借りてみましたがかかなりあぶないものじゃないですか!!何殺人衝動?自己対滅?死亡フラグがビンビン立ってるじゃないですか!!本当にありがとーございやしたー!!しかも起動したからその余波で研究所も爆破された?はっはっは!!

「ありがたくねーよ!!」

俺は落ちているレンガが5倍くらい大きくなった瓦礫を勢いのまま蹴った。瓦礫は空に飛んで行き粉々に砕けたのが見えた。

「オーノーOTL」

もう体が侵食してんのか。っていつか早くね？トーマこんな早く侵食しなかったよね？しかも力使ってないのにこれって・・・

「マスター」

「・・・なんですか？」

「殺人衝動やその他のことについてお知らせしたいのですが」

いまさら聞いたって何にもならないよ。どうすんだよ殺人衝動！！人殺すなんて俺に出来るわけがないじゃん！！しかも殺さないと最終的に肉の塊になって死ぬなんて・・・神様・・・俺何か貴方に粗相でもしました？しかも管理局にも追われるじゃん・・・

「マスター？」

「・・・話お願いします。」

いや、いまは少しでも話を聞いてどうにか殺人衝動とかを抑えられるような方法を探さねば！！

「まずマスターはゼロ因子ゼロ因子ライバー適合者です。」

早くも絶望。

「しかもそれにより殺人衝動が通常の感染者より数倍強いです」

俺オワタ。

「そして自己対滅も通常より早いです」

うきゃきゃきゃきゃ。殺せー！！いつそ俺を殺せー！！

「ですが私とのシンクロ率が以上に高いのでそれがぜんぶなくなっています」

うひゃひゃひゃ・・・ひよ？

「ちよっとまって。」

「Yes, Master」

「今の言葉をもう一回言って」

「? Yes, Master」

「いやそれのひとつ前」

「私とのシンクロ率が以上に高いのでそれがぜんぶなくなってます」

「: Really?」

「Yes」

え、じゃあなに？人殺さなくていい？肉の塊もなし？・・・

「YEAR!! HA!!」

「(くび)」

よっしゃー！！なに？なんですか？心配して損したじゃないですか。俺はうれしさのあまり目の前に居る彼女に抱きついた。

「マ、マスター／／／」

「あゝも〜！！よかったよかった！！適合したのが君で良かった！！」

「わ、私もマスターが私のマスターになってもらい本当に感謝しております／／／」

今の俺は最高にハイって奴だ！！なんかすっごいいい感触がするけど気にしない気にしない！！

「すみません、取り乱しました。」

「い、いえ、私も・・・そのマスターに抱かれてうれしかったです（ぼそぼそ）／／／」

なんか小さい声で最後のほうが聞こえなかったけどとりあえず許してくれたみたいです・・・え〜と。

「君名前は？」

「？リアクター・プロト00といます。」

「え、それが名前？」

「YES」

なんですか？それが名前？誰だよそんな名前付けたの。こんな美女にちゃんとした名前をつけないなんて。・・・そうだ！！

「ねえ、君。俺が君の名前を付けてもいいかな？」

「え、・・・マスターが…ですか？」

「いや・・・かな？」

「い、いえ！！とんでもないです！！マスターが名前を付けてくださるなんて！！」

「そ、そう。じゃあ名前を付けるよ？」

「YES！！」

なんかすっごい張り切ってるけど・・・なんで？まあいいか。えつと名前ね。正直名前を付けるなんてそんな経験したことがないからな。ん～・・・あ。

「アルマ・・・って名前はどつ？」

「アルマ。・・・それが私の名前・・・」

アルマこの名前は俺の前世でソプラノ歌手として活躍していた人の名前だ。俺は昔父親からその人のレコードを聞いてかなりほれ込んだ。

だ。しかもアルマは他にも小惑星の名前としてもあるし。彼女にぴつたりと思った。彼女は俺が付けた名前を何度も復唱していた。

「アルマ・・・はい、私の名前はこれからアルマと名乗ります。マスターが付けてくれたたった一つの名前」

彼女・・・アルマはそう言うところりと笑った。

と言うわけです。で今自分はアルマと一緒にエリオを探す旅をしています。まあ、エリオは自分のたった一人の弟ですから。

「マスター次の世界に転移します。お近くに。」

「了解了解」

俺はアルマの近くまで行くと彼女は俺に抱きついてきた。・・・

「なあ、アルマ」

「はい、何ですかマスター」

「こうしないと転移できないの？」

「YES」

これはすごいやばい！！アルマの胸の感触ががg・・・

「（ああ・・・マスター／／／）」

そして俺たちは次の世界に転移した。

エリオを探して三千里。いや、本当はそれ以上探してるんですけど（後書き）

アルマ登場。彼女はあるキャラクターと瓜二つです。

そして性格はデモンベインの忠犬です。

聖王の遺伝子が入ってるのにエクリプスの実験に使われた理由。

研究員がその情報を忘れていたからと言うアホな理由。

そして成長ホルモンを注入された理由。子供の姿じゃちゃんとしたデータが取れないだろうと言う理由。

感想待ってます。

#### 4話までの設定(前書き)

とある日の友人との会話

「閃光弾!!閃光弾!!」

「ひるめ!!ひるめ!!……あ、日刊ランキング入り御目」

「マジ!!何位だった?……よっしゃ!!今のうちに尻尾剥げ!!」

「一位だったよ」

「(。。。)ポカーン」

「ジョーに食われてるよ……あ、死んだ」

日刊ランキングに何があった……

#### 4話までの設定

高宮 京

身長 172cm

体重 49kg

年齢 6歳? (この世界での)

肉体年齢 15歳

精神年齢 26歳

レアスキル 重力制御

神様の失敗で死んでしまった男。だが神様が美人な女性だったのですぐに許した。アニメやマンガはあまり見ずいつもバイトばかりしていた。バイトばかりしていたのは両親が作った借金を返すためである。両親は京が小さいときに自動車事故に合い二人とも死んでしまった。両親のことは少ししか覚えていないが別に恨んではない。主人公が死んだのが借金返済し終わってなので借金はない。人には優しくが心情だが女性にはかなり優しい。昔は女性も普通に優しくくらいだったが、友人の洗脳もとい説得により紳士道を突き進むようになった。アニメを見ていないのにアニメネタを使っているのは主に友人の所為。友人は京をオタクの道に引き吊り込もうとしていた。

アルマ

身長 170cm

体重 血が滲んで読めない。

年齢 二ヶ月

すべてのリアクターの元になったと言われるデバイス。その正体は神様が魔改造した主人公のためのリアクター。性格は主人公至上主義。主人公のためなら何でも出来るがそれ以外には一切興味がない。（エリオは主人公の弟と認識しているので主人公の次くらいに優先順序が高い）正直主人公より強い（今の所）小さくなったり大きくなったり出来る。と言うか出来ないことがない。

#### 4話までの設定（後書き）

お気に入りかいつの間にか五百突破していた件について。  
皆様本当に有難う御座います。

気まぐれに書いた自分の欲望をさらけ出したこの小説。メインの小説より評価が高くてびっくりしました。

次の更新は10 / 11 / 12と三日連続で更新したいと思います。

シリアスとストロベラせてみた。後半妬ましいぞ主人公！！（前書き）

京とアルマの甘い日常を書いてみたかった。

反省はしている、後悔は七割している。

タグの時々シリアス発動！！・・・シリアスになってるのか？

シリアスとストロベラせてみた。後半妬ましいぞ主人公！！

「俺は悪くない！！作者に強いられたんだ！！」

「マスター？」

どうも強いられる男ことイワーク・・・じゃなかった高宮京です。

エリオを探して三ヶ月間の月日が流れた。正直疲れた。違う世界に転移し、情報収集、その世界に違法研究所があれば襲撃、なければ最初に戻る。この肯定を何回繰り返したことが・・・。

というかエリオどこいんだよ！！いくらいろんな世界に違法研究所がたくさんあるからってこれだけの期間探せば情報くらい入でしょ！！なのにエリオのエの字も見つからないなんて一体どこに連れてかれたのやら。

「マスター」

「ん？どうしたアルマ？」

研究所のコンピューターからエリオの情報を探していたアルマはこっち見ると俺に向かって手招きをした。俺はアルマに近づくとアルマの後ろからパソコンの画面を覗き込んだ。そこにはミッド語で文字がびっしりと書かれているのが見えた。・・・うん、なんて書いてるか読めない。この世界に生まれてまだちょっとしか経っていないのにミッド語とかどうやって覚えればいいちゅーねん！！

「・・・アルマ翻訳アンド説明お願いします」

「Yes, Master」

アルマはそう答えるとすごい勢いでパソコンのキーボードを操作していった。画面はその操作に合わせてウィンドウがドンドン出てきた。

「どうやらこれは他の違法研究所についてのデータみたいです。ネットからつながっていて他の研究所がリアルタイムでどうなっているか情報が来るようにプログラムされています。」

「それって他の研究所の情報を共有化してるってことか？」

「Yes」

なる。そうすればどの研究所からでも研究データが見れるし、もし研究所が襲撃されても研究データの移動と削除がすぐに出来るって寸法か。まあ、管理局の連中が考えそうなことっすね。っていうかそれって襲撃された研究所からも他の研究所のデータが見放題って意味なんじゃ？

「どうやらこの情報を見る限り十日前に第一管理世界ミッドチルダから近い世界の研究所で管理局の襲撃があったようです。研究員は全員逮捕、実験に使われていた二十名のクローンも保護されたようです。」

「・・・そのクローンの情報もしくは写真はないか？」

「調べてみます でした」

画面のウィンドウがすべて消え新たに二十ものウィンドウが映し出された。ウィンドウ一つ一つにクローンの情報、名前、そして顔写真が記載されていた。俺はマウスを動かし一つずつゆっくりと確認していった。

「 見つけた! ! 」

ウィンドウの数が十をきり十一に差し掛かった時それは見つかった。

「 実験NO・11。名称エリオ・モンディアル、魔力変換あり……か 」

……見つけた、……やっと、……やっと見つけたぞこのやろう! ! まったく! ! 心配かけさせやがって。よくもここまで俺に手を煩わせてくれやがったな! ! 再会したら最初に玉握ってこの三ヶ月間の苦しみを痛みで分からせてやる! !

「 アルマ、エリオが今どこにいるか分かるか? 」

「 ……場所は分かりませんがどうやら局員の一人が保護しているようです 」

「 そいつの役職と名前は? 」

「・・・執務官

フェイト・T・ハラオウン」

「フェイト・T・ハラオウン・・・ん？」

あれ？なんかすげー聞いたことある名前なんですけど。

「・・・その人の顔写真ある？」

「あります」

アルマはそう言うつとパソコンの前から退き後ろに下がった。俺はパソコンの前に近づくと画面を見た。画面は先ほど写していた二十ものウィンドウを消し一つだけ新しくウィンドウを出した。そのウィンドウを見てみると管理局員の制服を着た十五歳くらいの金髪女性  
が映し出されていた。・・・

「エリオ探索終了ー！！」

あゝも〜！！探しまくって損したじゃねーか！！この写真に写ってるの原作キャラじゃん！！しかもメイン！！FORCEのときの絵より若いけど間違いない！！なんだよ俺が探さなくってもこの人が助けてくれたんじゃん・・・ん？メインキャラに助けられたエリオって実はメインキャラだったりする？・・・わけねーかメインキャラだったらこんな子供な分けないか。

「あゝまったく！一気にやることがなくなったじゃないか」

いや、始めの方で疲れたって言ったけどまさかこんな形でエリオの探索が終わるとは思わなかった。というか俺探索が終わった後のこと全然考えてないじゃん。どーすんだこれから？やることなんかないぞ。

「・・・なあ、アルマ」

「なんでしよう?」

「どっか行きたい所とかない?」

「私はマスターのおそばに置いてもらえるなら何処でもいいです。」

「・・・ですよね」

正直その言葉はかなり嬉しいが今の状況ではかなり困る発言である。マジで参った。この世界でキャンプファイヤーしながら過ごすわけにもいかないです。食料も底をつきかけてるしどーしますか。ミッドに行くか?・・・だめだ、あそこは管理局の本部があるところじゃん。もしそんなところに行ってみる、飛んで日に居る夏の虫状態。俺の人生オワタになる。・・・そうだ、

「地球に行こう」

「地球ですか?」

アルマが聞き返してきた。

「ああ、もう次元世界も飽きたし、自分の生まれた星に戻ろうかなって。」

この世界の地球が前世の地球とどのくらい違うのか分からないが俺はそんなに違ってないだろうと思った。というか違っていている地球というのも案外気になるのだが。

「分かりましたマスター。お供します」

「おう！・・・あ、」

そういえばこの研究所はどうしよう？

「アルマ、ここに居た研究員はどうした？」

「それなら全員気絶させバインドで簞巻きにして外に放り出してます」

・・・そこまでやるか。まあ、いいか。違法研究員だし。

「アルマは外で研究員が巻き込まれないように守ってて。それで研究所がなくなったら管理局に連絡」

「分かりました」

そう言うとアルマは外に転移した。さてじゃあ俺もやりますか。

「ディバイダー00 set up!!」

そう唱えると体全身が光だし戦闘防護服に変わった。両手にはガンブレードが二丁そして空中に仮面と一冊の本が現れた。  
・・・うん、どう見てもトーマの第一形態の戦闘防護服だなこれ。それに銀十字の本に仮面。なんで仮面が出てくるんだ？これもなんかのアイテムなのか・・・まあ、顔を隠すのにちょうどいいんだけどね。

「デイバイドゼロ(Divide Zero)」

俺は魔法名を唱えるとガンブレードを上に向けた。

瞬間、轟音と共に研究所は消え去った。

第××管理世界違法研究所

「ドクター」

「ん、どうしたんだいウーノ？」

「この映像をご覧下さい」

ウーノと呼ばれた女性はそう言うとキーボードを操作して空中に映像を流した。

「ついさっき流された映像です」

「これは・・・!」

映し出された映像はついさっきまで京が居た研究所だった。だがそこには研究所はなく半径百メートルのクレーターが出来ていた。

「・・・なにがあつたんだい？」

「何者かの襲撃を受けていると他の研究所に一斉送信がされた三十分後にこの状況です。この映像はガジェットドローンI型に撮影させたものです。」

「襲撃者の映像は？」

「これです」

ウーノはキーボードを操作し新たな画像を映し出す。そこには仮面をかぶった京の姿があつた。この映像だけでこの惨状を引き起こしたのが京だと言つのが分かる。

「くつくつく!?!これだけの戦闘力を一個人が持っているとは・・・興味がわくねえ!!!」

「・・・」

「ウーノ」

「ハイ」

「彼の魔力ランクと居場所を教えてくださいませ」

「襲撃者の魔力ランクはS+、居場所につきましては不明です」

「そうか」

ドクターと呼ばれる男はその報告を聞くと椅子に深く座り込んだ。男は居場所が分からないと言つのに落胆の色を顔に出さなかった。

彼とはどこかで確実に会える！！

そんな気がしていたからだ。

「きみは一体何者だい？」

まるで映像の向こう側に京が居るかのよう質問した。ドクターと呼ばれている男の目はまるで好奇心を押さえられない子供のようだった……

びくっ！！

な、なんだ今背中に氷を入れられたような寒気がしたぞ！！

「マスター？」

「い、いや、なんでもない」

気のせいだよな。俺原作に関わるようなことしてないよね？というか原作知らないし。

「アルマ、何処に転移したんだ？」

「日本と言う島国の海鳴市という所です。」

のっけから聞いたことねえー。何処だよ海鳴ってそんな市どの県にあるっーんだよ！！・・・まあ、知らない市があるからってそこまですで前世と変わってるところはないだろ。この海鳴でも回ってみますか。俺はそう言うつとアルマと一緒にでつかいビルが並んでる方向に進んでいった。・・・あつ、

「アルマストップ！！」

「？どうなされたのですかマスター？」

「この世界にいるときはマスターって言うのはやめて、名前前で呼んでくれない？」

「・・・ええ！！マスターのな、名前をですか！？／／／」

この日本でマスターなんか呼ばれてみる一発で不審者扱いを受けるのは目に見えている。しかも唯でさえアルマは美人で人の目を集めやすいのにそんなプレイをしているのかと勘違いされて警察に捕まる可能性まで出てくるかもしれない。それだけは断固としてとめなければならぬ！！

俺はそう決意を新たにしアルマの方を見た。すると・・・

「わ、私がマスターの名を呼び捨て／／・・・い、いや落ち着け私。これはいいチャンスだ！！この状況はマスターとの信頼関係を

結ぶいい機会ではないか！だ、だがまで私！！マスターとは手すら握ったことがないのにそれはいささか順序違うのではないか……い、いえ、別にマスターの名前を呼びたくないのではなく私が……その恥ずかしくて、え、さっき抱きついてきたじゃないかって？あ、あれはその転移するために仕方なく……ち、違います私は嫌々マスターに抱きついたのではありません！むしろ大好きです！！愛しています！！ユニゾンするだけじゃ物足りません！！私がマスターと始めて逢ったとき／＼

「ポカ　　（　　）　　」

……なんぞこれ？

俺はアルマから数歩後ろに下がった。人通りが少ないとはいえここは道路のまん真ん中。つまり人通りがあるわけでありしかもクネクネと動くアルマがその道路を歩いている人の視界に入らないわけがない。要するに……

「おい、見るよあれ」

「うわ！！すげー美人」

「けどなんかクネクネ動いてるぞ？」

「あ、ほほを赤らめてる」

「頬を赤らめてる美女（；；）、（ハアハア」

「警察呼ぶ？」

「の前に動画とって二ヨ二ヨ動画に投稿だ!!」

「ほら、恭也もあれくらい私に対して愛を叫んでもいいんじゃないの?」

「なっ!!時と場所を考える忍!!」

「考えたら叫んでくれるの?」

「?当然だろ。」

「・・・えっ?／／／」

「・・・こうなる。マジで勘弁してくださいアルマさん!!あんまり目立ちたくないのに何でこんなことになってるんだよ!!これじゃあ意味ないじゃん。」

「マスター!!愛してます!! I LOVE YOU!!／／／」

もうやめてくれ!!

「・・・すみません。こんな無様な姿をマS「京な?」・・・キヨウ／／／(ぼそ」

やっと落ち着きを取り戻したアルマと一緒に俺はビルが並ぶ道路にたどり着いた。俺の予想道理この通りは人が多くシヨッピングモールのようなものが在った。俺ははぐれない様にアルマの手を取りシ

ヨッピングモールの方向に歩き出した。

・・・その間まるで借りてきた猫のように静かになったアルマは顔を赤くし俯きながらついてきた。

シヨッピングモールの中は、いろんな店が横一列と並んで、そこを歩く人たちで賑わっていた。

俺はアルマの手を握り締めたまま先に進んでいった。

「あの、キヨウノノ（ぼそ）」

「ん？どうしたアルマ？」

「何処に行こうとしてるのですか？ノノノ」

アルマは顔をさっきよりも赤くし聞いてきた。・・・やばい、赤くなったアルマがかわいすぎて生きるのがつらいです。俺は自分でも顔が赤くなるのを感じながらも答えた。

「あ、ああ、アルマの服でも買いに行こうかなと思ってノノノ」

「私の服ですかノノノ」

正直今アルマが着ている服は研究所のロッカーから拝借した女性の服だ。お世辞にも似合ってるとはいえないがこれを着なければアルマは黒のインナー（シグナム達が最初に着ていた服）ですごすはめになっていたのだ。あの服は、体の形をそのまま出してしまうような服でたださえスタイルのいいアルマがきるとさながら凶器といえるような代物になってしまうのだ。

「ここだ」

俺たちは女性者の服を売っている店を見つけるとその中に入っていた。

「いらっしやいませ!」

出てきたのは髪をショートカットにした若い女性だった。

「なにをお求めにこられましたか?」

「彼女の服を一式見繕ってほしいんだけど」

そう言うと店員はアルマの方を向き何か納得した表情をしたあとこっちを向いて聞いてきた。

「彼女さんですか?とてもお綺麗ですね!」

・・・えっ?

「い、いや彼女というかそれはちょっと違うというかノノ」

「え、そうなんですか?」

店員はそれに不思議そうにしながら聞いてきた。俺はそれにぎこちなく答えるとアルマにも了承を得るために隣を見た。

「そ、そうだよな?」

すると・・・

「彼女・・・マスターの彼女・・・ゆくゆくは結婚。／／ちよ、ちよつと待ってください！！さすがに結婚はまだ早いです！！まだお互いに理解してないところがあるかもしれないし・・・あつ、けしてマスターを理解してないわけではないのですむしろその逆！理解しすぎてマスターへの愛が／／」

「ポカ（。。（ン」

「ポカ（。。（ン」

アルマをとめるのに三十分かった。

「重ね重ね申し訳ありません・・・キョウ／／（ぼそ」

正直アルマが壊れる前にこの町から離れたほうがいいんじゃないかと思ってきた。店員さんも苦笑いしてるし。

「もういいから。気にしなくてもいいって。それよりもホラ服を選んできなよ俺はこの椅子に座って待ってるからさ」

女性者の服など選んだことがない俺が言っても意味がないだろうからここで待っているとアルマに言った。アルマは分かりましたと言うと店員の後についていった。そのときのアルマの顔が少しさびしうに見えた。

「・・・ふう。なんか疲れた。」

女性専門の服屋に男が一人だけいるという状況、これがさらに俺を

追い詰める。しかも服屋にいる女性の殆どがこっちを見ているとなればなおキツイ。

「服買ったら次は俺のか・・・」

実は自分の服も研究所から拝借したもので俺はアルマと一緒に服を一着も持っていないかった。

「・・・金はあるからいいか」

研究所で盗んだ金目のもの、それをこの店に入る前に質屋に全部売りさばいた俺は自分が窃盗をしたという罪に心を痛めていた。・・・のだが違法研究者のだからいいか。つと最終的にそう言う結論に至った俺は頭の角に窃盗罪という言葉を追いやった。

「・・・にしても、おそいな」

一体なにを迷っているのだろうか？つと椅子から立ち上がると俺はアルマたちが進んで行った方向を見た。すると・・・

気安く私の体に触れるな！！私の体を弄んでいいのはマスターだけだ！！

ええっ！！で、でもそれじゃ身長とかバストとかヒップのサイズが測れないですよ！？

という声が聞こえるのと同時に自分に向けられていた女性の視線がごみを見るような視線に変わったのが分かった。

「あの、・・・アホンダラアアア！！」

俺は全力でアルマの元まで走っていった。そのときの俺の走るスピードは、某速さを求める兄貴と同じ速度だったらしい。

「もういや・・・あの店には行きたくない・・・」

俺はショッピングモールに備え付けられているベンチに座り愚痴をつぶやいた。アルマは俺の隣に座っていた。

どうにかアルマの服を買うことの出来た俺はすぐさま店から退出した。・・・なんだよ、俺が何したって言うんだよ。何もしてないだろ、地球に来てこんなことになるなんて、神様やっぱり俺のこと嫌い？特典二つ神様に押し付けたのが悪かったんですか？

「・・・あの、キョウ（ぼそ）」

「・・・ん？なに？」

「・・・すみません。キョウ（ぼそ）にご迷惑を掛けてしまって」

謝るアルマは本当に申し訳なさそうにしていた。俺はあわててアルマのフォローにまわった。

「い、いや、別に迷惑なんか掛けてないぞ！むしろ、え、その、あんだ俺のことを思ってくれてかなり嬉しかった」

俺は顔が熱くなるのを感じながらもアルマに自分の素直な気持ちを答えた。こんな美女にあんなこと言われて嬉くない奴がいるかって

「の!!」

「・・・キョウウ(ぼそ／＼)」

なんかアルマが潤んだ瞳でこっちを見てるんですが・・・

「そ、そんなことより、どういった服を買った見ていいか」

俺はそう言つとベンチに置いてある袋を手に取ると中を見た。服の殆どが大人の女性という気配をかもし出すような服ばかりだった。俺は服を見ていくとあることに気がついた・・・

「なあ、アルマ？」

「は、はい／＼／」

「下着は？」

そう、袋の中に下着が一枚も入ってないのだ。俺は嫌な予感がしながらもアルマに問いかけた。

「下着なら今着ていますが・・・御所もうなら今脱ぎますよ？」

「いや、いい!!」

俺は答えるとすぐさま考え始めた。え、と言う事はなに？下着一着しかない？それは駄目だろ女性として!!今は昼時だし今から買いいはいけるけど・・・女性の下着を売ってるところってさっきの店しか無いようだし・・・。

「・・・さっきの店に戻るぞ・・・」

「キョウ？」

駄目だ。下着を買いに行こう。女性の視線なんて我慢してれば大丈夫だ！！もし駄目だとしても下着をかうのにそんなに時間がかからないはず！！

俺はそう自分に言い聞かすとアルマの手を取りさっきの女性服の店に戻っていった。

店の中に入るとすぐさまさっきの店員が俺たちを見つけ寄ってきた。俺は事情を話すと店員は奥の下着コーナーに案内してくれた。俺は、待つてると言おうとしたのだが店員に止められて一緒についていくことになった。

「・・・きまずい」

俺は試着室の前で待たされていた。店員からの説得とアルマからの無言の視線。それになうはずが無かった。選んでやるといったときのアルマの顔がすごく喜んでいたので印象的だった。店員はそれを聞くと下着を三着ほど持ってきてアルマに着るように促していた。アルマはそれを了承。試着室に入っていった。・・・で現在に至る。

「・・・キョウ（ぼそ／＼／」

「おっ！ー！ー！」

アルマの声がした。俺はそれを聞くといよいよ来たつと思った。

「準備が出来ました／＼／」

そう言うと試着室のカーテンが動く。俺は覚悟を決め出てくる未知の結末 > A c t e s t F a b u l a < に視線を向けた・・・

「ど、どうでしょうか？／＼／」

最初に目に入ったのは純白の白だった。その色は穢れを知らずなに者にも汚されることは無い無垢な赤子のよう。それが彼女の大人っぽさと化学反応を起こしていた。・・・まあようするに、

「ギャップ萌え・・・ブッフ！！」

「マ、マスター！！！！」

俺は鼻血を出しながらもアルマの下着を凝視していた。

あぶない、マジで危なかった・・・。あのまま鼻血が止まらなかつたら二度目の死を迎えるところだったかも。俺は鼻を押さえながら椅子に座り込んだ。この椅子は折りたたみの椅子でさっき店員が持ってきてくれたものだ。

「・・・あと二着」

・・・俺生きれるかな？鼻にティッシュを詰め込みながら待っているとアルマの声が俺の耳に響いた。

「キョウ・・・二着目です／＼／」

きた！！俺は鼻をつまみそれと相対した。

最初に目に入ったのは真っ赤な色だった。その赤はまるで炎のようにすべてを燃やし尽くすかのように思えた。それが彼女の大人っぽさと見事にマッチしていた。・・・まあ、ようするに

「ベストマッチ・・・ガツハ！！」

「お、お客様！！」

俺は吐血しながらも下着を凝視していた。後ろで店員がバタバタと慌しかった。

「（。。。）ポーーーー」

なにも考えられない。血が少なすぎる。俺死ぬ。

「・・・はっ！！俺はなにを？」

俺は意識を覚醒させるとさっきの状況について考えた。

「鼻血がティッシュでせき止められてまさか口から出るなんて・・・」

「

だがそれも後一回。この最後の下着が終われば俺はこの血の池地獄から開放される！！俺はティッシュを取るとアルマの準備が整うのをまった。その途中店員が輸血パックを持ってきたがそれを俺は断った。・・・というかどこから持ってきた？

「キョウ・・・最後の一着です／＼／」

アルマの声に反応する俺。これがLAST BATTLEだ！！気を引き締める！！俺は試着室に視線を向けた。

黒。ただそれだけ。それはまるで漆黒の翼のように見えた。彼女の黒い髪と色が似ており、彼女の為に作られたように思えた。俺はそれを見て・・・

「・・・」

前のめりに倒れ気絶した。

マスター！！大丈夫ですか！！返事をしてください！！

キヤー！！店長！！店長！！お客様が鼻血と吐血しながら倒れた！！・・・でもなんか幸福そう。

どうしたの？って何これ殺害現場！？救急車！！早く救急車を！！

は、はい！！救急車！！救急車！！

誰がそんな古い呼び方しろって言った！！

「なんや？えらいあの店の中が騒がしいなあ？」

「何かあったのでしょうか？」

「そんなことは良いから！！はやくアイス屋に行こうぜ！！早くしないと売り切れちまうよ！！」

「ハイハイ。分かったから少し落ち着き。アイス屋は逃げも隠れもせーへんから。」

そう言うと三人組のうちの二人組みがアイス屋に向かって歩いていった。

「・・・（この感じどこかで）」

だが三人組みの一人だけその店から出てくる懐かしい気配に足を止めていた。

「シグナムどないしたんや？」

「い、いえ。今行きます。主はやて」

「何してんだよシグナム早く来ないとお前の分のアイスが私のものになるぞー!!」

「なっ!! ヴィータそれだけは許さんぞ!! あの店のチョコミントは私のものだー!!」

立ち止まってた女性は百メートル走選手も真つ青な速さで走っていた。

シリアスとストロベラさせてみた。後半妬ましいぞ主人公！！（後書き）

初めてこんなに書いた。というか評価がすごすぎてそれにあつた小説を書こうと思ったけど。難しい、この小説はどこに向かつて走って行ってるのか？

感想、意見待ってます。

**バイト戦士参上！！俺は接客業の達人だ！！ 前編（前書き）**

お気に入り千人突破！！ヒャッハー！！一体何が起きたんだ？

千人突破の記念としてなんか書くべきか・・・

けど何書くか思いつかない。

バイト戦士参上！！俺は接客業の達人だ！！ 前編

あ…ありのまま今起こった事を話すぜ！アルマと一緒にシヨッピングモールに居たのに、気がついたら病院で寝かされいつの間にか一日経っていた。な…何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった…頭がどうにかなりそうだった…催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

気がついたら病院で寝かされていた男。ポルン…高宮京です。

あのこと何故か俺のベッドで添い寝してたアルマに聞いたところ。どうやら最後の下着を見て気絶した俺はすぐさま病院に搬送され、輸血されたそう。で、そのまま病院のご厄介になって今日の朝目覚めたらしい。

…気絶した挙句に出血多量で輸血って。いや、そりゃ今まで生きてきた中で女性の下着を見るなんて事は一度も無かったけど、いくらなんでもこれは無いわ。…つーか前にもこんな事態に陥ったようなきがするんだが。

「マスターどうかしましたか？」

俺が黙っているのが気になったのかアルマは俺に問いかけてきた。俺はアルマに、なんでもないと答えると歩みを進めた。

病院の先生から退院の許可を買った俺はすぐさま着替えてアルマと一緒に昨日買えなかったものを買ったためにショッピングモールに行った。下着も結局買わずに店を出てしまったからだ。

ショッピングモールに着くと俺達は昨日の服屋に入っていった。中に入るとすぐにあのときの店員を発見した俺は昨日の事を謝り試着した下着を全部買った。その時店員がニヤニヤしてこっちを見ていたのが印象的だった。・・・なんだよ!!!三つとも似合ってたんだから良いだろ別に!!!

「え〜と。服、下着、旅行鞆、生活用品、テント、釣竿、・・・こんなもんか、アルマ?」

ショッピングモールを歩きながら俺は横にいるアルマに確認を取った。

「はい、生活するのに必要なものはすべて買ったかと。」

「了解了解」

俺は、アルマからの答えを聞くと人通りが少ない道に入っていた。今からすることをこの世界の人に見せるわけにはいかないからだ。

俺は路地に入ると、買ってきた荷物を地面に置いた。そして、右手を前に突き出し人差し指で何も無い空間を上から下へとなぞった。すると、そのなぞられた空間がいきなり裂け小さかった亀裂が段々大きくなりやがて半径50cmくらいの黒い穴が出来上がった。俺はその黒い空間に大して驚きもせず地面に置いてあった荷物を一つ一つ放り込んでいった。やがてすべて入れ終わるとそれを察知した

のか黒い穴は段々小さくなり跡形も無く消えていった。

「相変わらずマスターの力はすごいですね。小型のワームホールを作り出すなんて」

「うん、俺も出来るとは思わなかった」

「・・・えっ!?!」

神様に貰った重力制御のレアスキル。俺がこれを選んだ理由は昔友人から教えてもらったゲームで、あるキャラクターが使っていた能力だったからだ。そのゲームはロボットが出てくるゲームでそのキャラクターは重力を操る機体に乗っているなことをしていた。どっかの空間から剣を出したり、その空間にビームをうち何故か違うところからそのビームが出てきたり、拳句の果てには小型のブラックホールを打ち出すという技も使っていた。

俺がさつき使ったのはそのキャラがかなりの頻度で使っていたワームホールというものだ。ワームホールの説明はながつたらしく覚えていないがとりあえず重力が関係していたと・・・思う。・・・つか本当に出来るとは思わなかった。できたらいいな〜と言う感覚でやったから本当に荷物がワームホール内にあるかもわからない・・・あとで確認だな。

「買うものはすべて買ったし、手荷物も無くなったことだしどこかに昼食でも食べに行くかアルマ？」

「あ、・・・はい。マスター」

アルマは何か腑に落ちないという顔で俺についてきた。・・・うん、

気持ちも分かるからそんな顔しないでくれませんか？俺はそんなチート野郎じゃないんだから。

ショッピングモールから出てきた俺たちは近くの商店街に来ていた。あのショッピングモールジャンクフード関連は在るのにちゃんとした食事関連の店が無かったのだ。前世で自炊してた俺としてはジャンクフードを食べるのに抵抗がありここまでできたと言う事だ。

「しかし、商店街に来たはいいがどんな店があるかわからないな。」

「そうですね。見たところそういった店はここもあまり多くは無いみたいですし。」

俺たちは商店街を歩きながらお目当ての店を探していた。すると・

「マスター。喫茶店ならあそこにありますが？」

「ん、喫茶店？」

俺はアルマの指差す方向に眼を向けるとそこにはある店が並んでいた。

「え〜と。なになに。喫茶店翠屋か。・・・うん、雰囲気がいい店みたいだしここにするか？」

「Yes, Master」

「・・・店の中では名前と呼んでね」

「Yes、M・・・キョウ」

俺はそう言つとアルマと一緒に翠屋に入つていった。

「いらつしゃいませ。何名さまでしょうか？」

店に入るとすぐに店員さんがこつちに駆け寄つてきた。・・・美人だね。何この町？何でこんなに美人な女性がいるの？さっきのショッピングモールの店員さんも美人だったけどこの人はそれ以上じゃないか！！俺はポーゼンとしてると横腹に軽い痛みを覚えた・・・

「・・・どうしたアルマ？」

「・・・いえ、ゴミが付いてたので」

アルマはそう言つと手を俺の横腹から離れた。・・・いったいなんだ？俺はそれを気にしながらも店員に何名かつたえ席に案内された。そのあいだアルマはいつも以上に無口になっていた。

席に案内された俺たちはメニューを見てすぐさま店員を呼んだ。

「すみません。注文良いですか？」

「はい、今行きます。」

さっきの店員はメモ帳を持ってこちらに向かってきた。

「え」と俺はこのオムライスとトマトサラダそのあとにコーヒーをお願いします。アルマは？」

「私もマ・・・キョウと一緒にものをお願いします。」

「わかりました」

そう言うと店員は店の奥のほうに入って行った。店の中は昼時ということで人が段々多くなってきた。少しでも遅くなったら店に入れなかったかもなっと。考えているとさっきの店員が注文した料理を持ってきた、いつの間にか時間が経っていたようだ。

「お待たせしました。ご注文のオムライスとトマトサラダです。」

店員は俺とアルマの前に料理をおくとごゆっくりという言葉を残して新しく入ってきた客の接客に向かった。

俺は今来た料理に目をむける。オムライスはできたばかりと言わんばかりに湯気を出しておりその湯気がオムライスの出てくる匂いと合わさり俺の鼻腔をくすぐった。俺は我慢できずオムライスをスプーンにのせ一口口の中に入れた。

「なに、こんなうまい料理今まで食べたこと無いんですけど。」

「はい、私もとてもおいしかったと思います」

俺たちは食事を終わらせると最後に来たコーヒーを飲んで腹を休ませていた。店の中も段々にぎわってきたと察知した俺は会計を終わらせようと店員さんと呼ばうとしたが・・・

「えっ！！バイトの子がこれなくなっただんですか？」

そんな声が聞こえ俺はそちらのほうを見た。

「そうなんだよ桃子。どうやら風邪を引いたらしくてさっき電話があっただ。」

「そうなんですか？でもこまっただわね、今からが一番人が多くなる時間帯なのに」

「しかたないよ、いままでこの時間帯の接客を一人でやっていたんだ。今日くらい休ませてあげよう」

店員とマスターらしい男の人はそう言うのと難しい顔をしていた。俺はゆっくりとその二人に近づいて行くと声を掛けた。

「あの、すみません。」

「はい、あ、お会計ですね。いま「いや、違うんです」？」

「あの俺がそのバイトの人の変わりをしましょうか？」

その言葉を二人は聞くと驚いた顔をしたが男の方がすぐに答えた。

「気持ちは嬉しいけど、お客様にそんなことをさせる訳にはいかな

いよ。」

「いや、そんなことは気にしなくても良いですよ。これは俺がやりたくって言ってるんで」

しかしねえ、と言う男の言葉に急にさっきの店員の声が割り込んだ。

「土郎さんいいじゃないですか。手伝ってくれるのなら私達も助かりますし」

「桃子……」

土郎と呼ばれた男はそう言うとは仕方ないと言う顔をしてこっちを見た。……よく見たらイケメンじゃないですか！！しかもさっきの店員さんとの会話！！リア中爆発しろ！！

「?どうしたんだい？」

「……いえ、世の中の無常に嫌気がさしていただけです」

「この状況で？」

「この状況だからこそです」

土郎は意味が分からないと言う顔をしていた。

「俺は高町土郎こっちは妻の桃子だ」

「高町桃子です。」

「あ、俺の名前は高宮京です。後ろにいるのがアルマです。」

「（ぺこ）」

自己紹介を終わらせると俺たちは店の奥に連れて行かれた。

そのときの俺たちはまだこれから始まる戦争を予感することができなかった・・・

・・・あれ、高町って聞いたことあるような？

**バイト戦士参上！！俺は接客業の達人だ！！ 前編（後書き）**

グダグダ間がいなめない。

と言つか二日連続疲れた。アホな事言っんじゃなかった・・・

主人公着々と原作キャラに会うフラグが立っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5120z/>

---

チートが（ばれたら自分の身が）危なすぎて介入できるか！！

2012年1月11日15時23分発行